

りぬ、一絲亂れざる三艇は隼の如く馳り出ぬ水煙高く艇首に起りて其の勇壯なる事言語に絶せり何れも弟たり難く兄たり難き猛者漕手の結昌なり彼一漕すれば我一漕し互に前後を争ふて六百米位に入れるや我が艇手、ラストヘビー一聲高く絶叫するや漕手等も黒金の腕も折よとばかり檻の櫂も折よとばかりビツチは四十五迄繰上げられぬ力漕に亦も力漕遂に決勝線に突破しぬ青に先する事半艇身白旗は高く翻れり

見事昨日の敵今日は一舉にして二隻とも葬り去りぬ遂に普榮へし、御影も今はソロモン榮華の夢路をばたどりつらん

艇静かに數萬の看者群集せる渚に付けば群集一時萬歳の聲をあげて我等が萬歳を祝しける關西學院も敵味方折忘れ盛にフレーベルヒコネの聲援を與へくれぬ、其の聲大盤石を動かし我等の耳も聾せんばかりなり。

これに反して御影の撰手只消然として以前の熱狂もいつの事やらとばかり其昔彼の行く所として敵なき稀世の大英雄ナボレオンも武運盡きては如何

せんあはれ孤城落日、海上遙か孤島セントヘレナに風寒き夕朝に消ゆる萩に措く露の命にも待たずして、倒れたる勝負は只時の運とこそとなくさむる生徒の身なぐさめらるゝ撰手の心、思ひやるだに一掬の涙灑がすんばあるべからず

勇しくも殞れし御影の諸勇士よ勝負は時の運なり畢生の遺憾事とする所にあらず、乞ふ健在なれ、而て来るべき日の計を待つて再び襲撃せよ、我等再び御身等と中原に覇はん時已に後、我は第三回目の戦闘をするに至れり

敵手白とは、鹽屋青年團の第一の無敵のものなり寒風肌をつん裂く、嚴寒にも炎帝狂ひてために金石熔けん夏の日も冲の鷗と彼等は、終日波を櫂に暮す水兵上りの屈強の荒蠻師なり、即ち体軀に於てに轉凜然たらしむるの体軀なり、他の赤の敵手は之も亦、其の職水上にありて朝な夕なに海上に起臥すべき水上警察の荒豪傑なり、即ち体軀に於て職務に於て、將亦住所に於て已に此の如き差異を生せり、されども我等競漕は常に腕を從として精神を主とするにあるを知れり、即ち我等の頼む所

は、精神上にあるのみ。

鹽屋村の青年團を應援すべく全村の老若男女の區別なく統て海岸に集り或は手拭を打振り或は絆天を冲高く投げ上げわめき叫ぶ聲喧々轟々たり、一方水上署に於ては、署艇たる保安、鳳の汽艇を飛して天も裂け地軸も折れむばかりの聲援を行ひぬ、然るに体軀小にして色白き書生組の我が彦中一人孤軍而るに敢て亂れず、争はず悠々迫らざる態度實に快也矣と三稱せざるを得ざりき。

而るに此の時しも天帝如何と思きや驟に灰雲濛々と連に西に足早く風伯一陣颶たる暴風となり一陣亦一陣怒れる度度に海は巨靈の手に撮上ぐらるゝが如く狂瀾怒濤白鬱を立てゝ来る、事急洶湧怒號一舉にして長汀を洗い去らむとす。

三艇を曳く汽船は鯨の如き大なる赤き船体を斜めに半ば顯はし進水機は空に回轉して其の響轟々たり、かくて此に曳かるゝ三艇の動搖押して知るべきなり、遂には雨沛然と降り來り漸くして浮標を捕ふると見る間に銃聲一發スタートは切られたり阿修羅の如く叫ぶ狂瀾怒濤の中を木葉の如き小艇

は或は萬丈の高きに昇ると見る間に忽ち那落の淵に落込み我等は互に艇を敵とせず怒濤を相手として戰はざる可からざる境遇となりぬ我等は激浪に奔翻されつゝ無我無中に力漕しね、バツクモアーモミツドルヘビーも已に今は行ふべき時にあらず三艇は互に狂瀾の中に見えづ隱れつ、獅子奮鬪の勢、腕は全く棒となりぬ、眼は全く暗みぬ。

無意識の裡に遂に決勝點に入りぬ、すは何れが勝ちかと陸上見やればあなうれしや青の旗何ぞ顔色あらんや。

波は益々狂暴を擅にしぬ。水上警察よりは上陸は危険なれば禁示さる、今は去むなくたよる術なき雨中激浪中を奔翻さるゝ事實に數十分遂には審判船に着くを得て撰手は汽船に乘移り船は只激浪中を東さして進みぬ、遂に莉藻島とか言

出 漕 著 コース 着順 分 數			
水上警察(赤)	一	二	三分五十五秒
彦根中學校(青)	二	一	三分五十秒
鹽屋青年團第一(白)	三	三	不明

へる、離島に漂流避難するに至れり、競漕時の着のみ着のまゝの姿にて雨中の市街を通つて宿屋に無事歸りしは已に六時を過ぐる事半。抑も此の大會に参加せしもの實に四十有三艇而して最後迄残りし勇士は、即ち我と關西學院高等部どのみ。

即最後に此度の月桂冠を爭ふべきの權利を有するものは此の二校あるのみされど天候益々險惡暴風雨の警報すら出ぬ、明日とて天候恢復さる可きの模様なれば去むなく此の大會は中止となりぬ。されど月桂冠は我が手に落ぬ、優勝旗は我校に歸しね、愈々明くる十日名譽ある優勝旗は先頭に端翻しつゝ懷しき神戸の土地を辭して遙か故郷の空に向ひて歸途に付きしは午前十時半。歸心矢の如く（勝しがためにか）汽車の走りもいと遅く思はれつゝ、遂に彦根驛頭に再び歸りしは午後三時を過ぐる十五分去んぬる此の土地を去る時の金龜城下の誓も今は眞として顯れたり數多萬歳の聲に包まれ、觀呼の聲裡に被はれて校舎に歸る時の部長初め戰士の心の裡や如何に得意なりけん



登壇之辭

我等一同淺才未學の身を顧ず雜誌部理事の重任を托せられました一同の光榮に存する次第であります駕鈍を盡し全力を擧げて我校友會雜誌の進歩發達を圖ると共に願はくば聰明なる校友諸兄の助力を獲て以て此重任の責を盡し度い精神であります新涼訪れて殘暑を一掃すると共に我校は漸く新築の工を了へんとし我等は新校舎に移るを得ました純白なる壁の色新しき木の香一種清新の氣は校内に漂ふて居る。此處に學を受ける我等生徒も宜しく從來の姑息なる學習法を棄て新しき元氣を以て勉強を始め度いものであります。

今や世は戰雲に蔽はれ澳塞の葛藤は引いて全歐の

斯して我部の大遠征も成功し、關西艇界の霸權は我が校に歸し、願はくば將來の第二の戰士よ此の大光榮を固持して佐和の山岸の川長へに聳へ流るゝと共に長しなへに我部の固有物となし終んぬこそ切に望む處なり、乞ふ夢忘る勿れ此の名譽を此の偉大なる功を成し遂げしはよく我等戰士の腕のみにはあらざるなり、我が校友會員諸氏の物質的に精神的に多大の援助を與へられし事與つて力大なりといふべし、精神上にて我は善く敵を壓せしに寄るなり。

彼の日露の大捷を得しは善く銃後の人ありしがためなり我等の今回の大勝を得しは善く槍後の人ありしによらんぞや言はん。



大亂となり更に其禍は東洋に波及し遂に我帝國も東洋の平和のため獨國に對し劍を振ふの止むなきに到りました文化の淵叢全歐は變じて戰の巷となり般々たる砲聲勇壯なる喇叭の響飛び行く彈丸輝く軍刀征馬の嘶き馳け行く軍兵は風の如く轟く喉聲は百獸の咆哮と紛ひ勇ましくも物凄き光景であります我等は戰場に立つものではない然し常に兵士の突撃の時の心を持つて居度い書物は城である一書を讀んだるは一城を抜くに等しい浮世は常に兵戦である吶喊を大呼して薦進する勇なくんばい悟で居るならば我雜誌部の如き固より大なる隆盛を見る事と信じます一言陳べて登壇の辭に換へた次第であります

第一十六回 卒業式

冬の長き夢漸く醒めて深山に茂る大木も道の邊に生ふる小草も今や其蓄藏を盡くして活動を開始せんとし天地は將に新生面を開かんとする。

此の生氣乾坤に満つるの時我本校は又此に。十餘名の俊秀を社に會送り出さんとして彌生の二十と六日と云ふに嚴かな卒業の式を擧げられぬ。

此の日知事閣下代理を始め諸顯紳士卒業生父兄の御列席ありて更らに一段の光彩を加へぬ。

十時校長閣下の式辭を以て或は開かれぬ、君ヶ代二唱勅語捧讀卒業證書授與終りて知事校長閣下の懇篤なる訓辭諸彦の熱誠なる祝辭ありかくて生徒總代の祝辭及卒業生總代の答辭に次ぎ品行學業優等なるもの並に精勤者に夫々賞品を授與せられて式は全く閉されたり時に午前十一時半なり。

告辭

本日縣立彦根中學校第二十六回卒業證書授與式を舉くるに方り茲に諸子の卒業を祝し併せて前途の爲に一言告くる所あらんとす諸子在學五年螢雪の

卒業生諸子に告く諸子が入學以來孜々勉勵の功終に空しからすして乃本日卒業の榮譽を荷ひしは予の衷心喜悅に堪へる所なり然れども諸子は未たこの榮を以て満足すへからず諸子の爲めに大に喜び大に祝すべき時は尙前途にあるべし即ち諸子は是れより或は進みて高等の教育を受け或は退て實務に從はん其何れたるを問はず皆將來國民の中堅となり國家の重きに任すべきものなれば今後益々修養を積み研鑽を怠らず智德を進め實力を養ひ徐ろに器材を大成して以て其重任を盡さんことを期せざるへからず尙一言して諸子に望まんとす抑も青年は一國元氣の源泉にして國家活動の中心たり若し青年の元氣にして衰へんか國家の興隆得て望むへからざるは固より言を待たずして明かなる所なり然るに近時青年の風紀漸く頽廢して放恣淫逸に流れ元氣亦鎮沈して浮華優柔に陥り乃興隆國民間に見るべき所謂元氣の旺盛なる意氣の壯なる或は質實剛健敢爲等の如き氣風精神は漸く我か青年間に之れを見る能はさらんとす豈に慨嘆の至りならずや此の時に方りてこの滔々たる頽勢に抗し

功を積み今や本校を卒業す之れ寔に欣ふへし諸子は更に進んて智德を高級の學府に修めむとし或は出てゝ直に社會の實務に就かむとす其志や固より同しからさるへし然れども何れも其の前途猶遠く行路又困難なるものあるは言を俟たさるなり而かも克く困難に堪へて其の目的を貫徹すへきもの實に諸子が堅實なる志操と強健なる体力とに存す志操堅實ならされば以て其業を遂げ難く身體強健ならされば以て其志を達し難し志操を堅ふし體力を強ふし不撓不屈積むに歲月を以てして成業始めて庶幾すへきなり而して特に望む所は諸子が今後益々意を精神の修養に致し品性の向上に努め以て一點の瑕穢なきを期せんこと之なり諸子夫れ旗を勵めよ。

大正三年三月二十六日

滋賀縣知事正五位勳四等 佐柳 藤太
演辭

本日長官閣下及來賓各位の臨場を辱うして本校第二十六回卒業證書授與式を舉行するは本職の最も欣榮とする所なり

一般の氣風元氣を振作し國家の發展興隆に任すべきものは國民の中堅たるべき教育を受けたる諸子等を外にして亦他にあるへからずとす是に於て諸子の責任は愈々重く益々大なりと云ふべし冀くは諸子毅然として社會の風潮に動かされず敢然時流を排し勇往邁進克く其所信を貫き以て國家の期待に背かざらんことを

大正三年三月二十六日

滋賀縣立彦根中學校長 小早川 潔
祝辭

茲に本校第二十六回卒業證書授與の典を擧げらる今や校運日に進み實績月に舉り年と共に益々有爲の卒業生を出さる邦家の爲め洵に慶賀に堪ゑざるなり顧ふに卒業生諸子の其克く今日あるを致せるもの刻苦其業に勵み勵精其德を養ひ多年研鑽の效果からさりしに基くや言を俟すと雖も亦以て校長並に職員各位の啓導宜しきに適ひ薰化其則を得たるに由らすんはあらす今や諸子は既に中等教育を卒へ出てゝ高等教育の門に入り若くは實務に従はんとす他日の成功必ずや期する所ならん然りど

雖も前途亦固ニ遠し其志堅からざれば以て久に勝ふること能はす其体健ならざれば以て志を達すること難し冀くは諸子宜しく多年の教訓を恪守し益々徳操を保し併せて体力の養成に努め本校教養の趣旨に副ひ以て中堅國民たるの素志を貫徹せらることを聊か一言を叙し祝辭とす

大正三年三月二十六日

滋賀縣犬上郡長正六位勳五等 武田 豊藏

祝辭

本日茲に本校第二十六回卒業證書授與の盛典を舉げられ我が敬愛せる諸君は將に卒業の榮を擔ひて母校を去られんとする諸君の今日あるは是れ固より恩師諸賢の懇篤なる薰陶に待つとは謂へ亦以て兄等が五星霜立冬素雪の严寒を凌ぎ九夏三伏の酷暑に堪へ孜々として勉め切々として勵まれたる其の功に依らずんばあらず洵に榮譽と云ふべし

今や我が國威大に揚り而も世界の競争は愈々劇甚を加へ來りぬ此競争の活舞臺に立ち國運の隆替を双肩に擔ひ大正の新天地に活躍飛舞するものは國家中権の國民たる兄等を指きて他に求むべからずされば兄等の責任豈に重大ならずや兄等の前途豈に堪へ心に誓ふ所なり

終りに臨み在校生徒諸子に一言す生等は諸子と相扶け相導きて和氣藹々たる間に共に校庭に親みしも今や袂を分たざるべからざるに當り轉々懷慕の情に堪へざるものあり諸子が平素恭敬從順なりしは生等の深く感謝する所希くは向後益々師長の訓誨に従ひ校則を守り勤勉努力し夙夜怠る勿からん事を聊か蕪辭を述べて以て答辭となす

第二十六回卒業生總代

岩崎 甲藏

卒業生氏名	
岩崎 甲藏	(坂田郡) 井關 弘
鹿苑 慈教	(坂田郡) 大杉 友七
西川龜次郎	(犬上郡) 安部 捨藏
珠久 義造	(愛知郡) 相場 榮藏
神口 権八	(犬上郡) 成宮 英三
徳永 普照	(犬上郡) 森 元七
大日方重隆	(長崎縣) 柴 吉一
蒲山 元紀	(犬上郡) 今堂 義順
淺見市太郎	(坂田郡) 橋口 敏雄
衣斐 申造	(犬上郡) 宮尾源一郎
澤 秀之	(犬上郡) 内片 義信
前川宗太郎	(犬上郡) 中村 二郎
加藤甚一郎	(愛知縣) 淺野 蓮誠
片木榮之助	(犬上郡) 竹内 貫朗
松山 龍	(東淺井) 鹽谷 彰雄
熊谷 讓	(鳴根縣) 山中 莊造
村田 信一	(犬上郡) 村地 正義
赤田 真了	(犬上郡) 泽 純三
（犬上郡）	(蒲生郡)

大正三年三月二十六日

岩崎 甲藏

に遼遠ならずや、然れども其の行路は決して彼の坦々たる道路を行くが如くにあらず或は陰風怒號し澎湃たる怒濤の之を遮るもあるべく或は萬丈の絶壁前に横るもあるべし剩へ浮華淫靡の妖魔は諸君を邪道に誘はんとしつゝあり希くは不撓不屈の精神を以て勇往邁進此の險難を越え此妖魔を拂ひ多年蓄積の學識を基とし益々研鑽鍛磨怠るなく以て上は國家の期待に對へ下は本校の名聲を揚げ恩師竝に父兄の鴻恩に報いられんことを

大正三年三月二十六日

滋賀縣立彦根中學校在校生總代 寺村 和一

茲に本日生等が爲めに卒業證書授與の盛典を擧げられ知事閣下竝に朝野諸顯の臨場を辱うす生等の榮何物か之に如かんや

顧ふに生等本校に入りて既に五星霜を經たり鷺鈞か蕪辭を陣べて祝辭となす

木村源左衛門（犬上郡）　後藤　嘉夫（犬上郡）
 梶口勝治良（坂田郡）　苗村從二郎（神崎郡）
 古川與惣吉（犬上郡）　山田・信義（京都府）
 矢島　知秀（犬上郡）　圓城常次郎（犬上郡）
 森地傳治郎（甲賀郡）　藤澤　徹眼（犬上郡）
 崎山　慶三（犬上郡）　村瀬榮一郎（東京府）
 山田信太郎（犬上郡）　宇治原末藏（坂田郡）
 山田　亮吉（福井縣）　横田　貫一（伊香郡）
 瀧谷　徳縁（犬上郡）　前田　二郎（和歌山縣）
 藤村秀四郎（犬上郡）　朴　武雄（朝鮮）
 塚本英二郎（愛知郡）　野坂　太造（坂田郡）
 膝馬　繁藏（愛知郡）　加藤　禪海（犬上郡）
 小林　茂雄（岐阜縣）　田中彥三郎（犬上郡）
 小林榮一郎（犬上郡）　西村彦右衛門（犬上郡）
 茶木精一郎（北海道）　中川　藤正（愛知郡）

先生を師と仰ぐの榮を得て愁眉茲に披きぬ先生語
學の奥義を極めらる希くば奮勵以て教導せられん
ことを。

畑先生を迎ふ　吾等先に植田先生を失ひ愁傷
の涙未だ乾かざるに四月十三日深學多能なる畑先
生を迎ふ吾等の幸之より大なるはなし
希くば先生。生等の爲めに斯學の蘊奥を授け給は
んことを。

始業式

櫻雲靄靄として春の夢正に酣なり時に四月八日父
母の膝下を辭して金龜城下に集ひし吾人大講堂に
第二十四回始業式を舉行せり。
校長嚴然として學期始まりぬ諸子の志慮又一層の
改善を望むを冒頭として時々數千言一つとして吾
等生徒の金言たらざるなし吾人深く胸底に感銘し
て拮据踰勉以て本校の名望を擧ぐるの覺悟なかる
べからず。

新入生を迎ふ

伊峯の頂き紫雲棚引き鳩の海邊に浪の花匂ふ萬象
洋々たる平和の春光に醉ひ天氣正に活動の氣に満
てり曩に五拾餘の先輩を送りし吾人は新に一百有
餘の健兒を迎へんとす四月十日對面式を行ふに當
り寂寞の心漸く暢び意氣揚々たり。
あゝ！彥陽の精華は汝等に依りて一層の光を加へ
んとす勉め勵めよや小健兒！吾人亦諸子を扶掖教
導するに客ならざるを期す。

昭憲皇太后遙拜式

思へば陽春十日あまり三日なりき。都も鄙も
おしなべて、吾世の星と云ふなる花に埋れて、
時じ／＼の吹雪衣の袖に重く、そゝろに春の
愁の身に沁むを覺ゆる時、わが皇太后の宮
には、玉の御眠の永くに覺めさせ給はず、先
帝の御跡を慕ひまゐらせ給ひて、竟に還りま
す事なき永の御幸に出でさせ給ひしなり。あ
はれ悲しいかな。

てか之に報いむ。他山の石切磋の良帥を失ふ素より耿々の情懷無んばあらず然りと雖も集散離合は士の常なり亦何ぞ囁嚅の痴態を演せんや。只時計の針の廻るが如く拮据罷免教に恃かざらんことを期すべきのみ。
 植田先生を送る　先生は悍鷹に似てまた家鳩の如く勇は以て鬼神を欺くべく愛は以て嬰兒を懷く可く柔中に剛あり剛中に柔あり多面多角不可思議の賦性を有せらる。本校に來任以來數學科を擔任せられ日夜劇務と戰ひ莘々營々力を屈し慮を焦して生等を育まる一旦病に犯され給ふや多年の疲勞こゝに發して容易に癒へず遂に職を辭せらる吾等流涕禁する能はず御回癒の早きを祈れり然るに祈願の功空しからざりしにや七月某日再び本校を訪ねられ親しく快顔を拜するを得たり我等が喜び何にか例へん。希くは先生健在なれ而して永く生等を顧みて扶掖の惠を垂れさせ給へ。
 太田先生を迎ふ　嘗て御子柴先生を得て喜びたる我等は幾何の歲月を経るなくして同先生の辭任せらるゝに遇ひ離愁の悲に泣きぬされど太田

世は諒闇の闇にとざされてより四十あまりの後なりき。五月二十日あまり四日。あゝ此の日、此の夜ばかり悲哀てふ印象を深く吾等の胸に刻まれし時ありや。

此夜八時に未だき頃。炎々と篝火燃ゆる我校庭に集まし吾等五百の校友、面見合はして言葉はなく、打しめりたるいどうらがなし。やがて城山の鐘を初めに、おちこちの寺院より、八時の鐘の音は、濕りし夜の空氣を震動せしめぬれば、五百の校友、静けさは以前にまして、咳一つするものぞはなし。炎々たる篝火は、人々の面を赤く照し、古城の廢濠に叫ぶ蛙の聲も今宵はわきて悲し。

校長には徐々と祭壇の前に進まれつ、玉串を捧げ、祭文を捧讀なごし給ひつ。其間、其の手、其の口、皆異様に震はせらるゝを見ぬ。校庭は未だ靜かなり。

突如沈黙は破られぬ。

金剛石のみささに……磨く心の玉はゝき
……吾等の語尾は異様に震えて、弱く闇の中

に消えてぞ入る。
式終りて家路につかんと悲しげに見上ぐる空に宵の星、二つ三つ寂しげに。（たけし）

昭憲皇太后御靈輜奉送迎

五月二十五日午後。皇太后の宮を送りまつらんとて、校友五百、諸先生引率の下に停車場に向ふ。

思へば二年前の秋なりき。木の葉散り敷きて風荒き時、我等は悲しき思して停車場へ向ひし事ありき。今日も亦彼時と同じき思は我等の胸に満ち来るなり。

と見る空、山、田、畑、家、人何れとして悲哀の思ひの満ちざるはなく、まこと乾坤の間悲哀てふ事の他には何物をも認めず。

二時を過ぐる頃、第一供奉列車は通過しぬ。轄て三時を報する城山の鐘、悲哀の空に入りぬれば、驛員の一人はメガホンを取りて「米原驛御發車!」

明治二十七年五月廿日內務省認可

大正三年十月十二日印刷

大正三年十月十五日發行

(非賣品)

發行所 滋賀縣立彦根中學校 校友會

彦根中學校內

發行編行號入卷 毛 雪

岐阜縣安八郡大垣町字郭一壹

西濃印刷株式會社代表者

印刷人 河田貞次郎

印刷所 西濃印刷株式會社